

第3章 本市の食を取り巻く現状

- 1 食に関する調査からみる現状
- 2 これまでの取組と目標達成状況
- 3 視点ごとの課題の整理

1 食に関する調査からみる現状

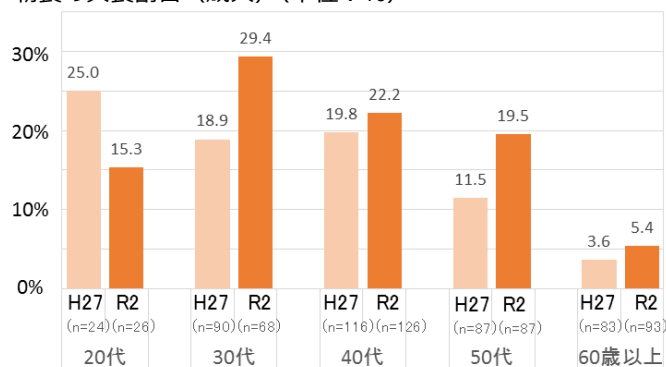
令和元年度（2019年度）及び令和2年度（2020年度）に実施した市の事業等におけるアンケートや調査の結果からみられる現状は以下のとおりです。

(1) 朝食について

毎日朝食を食べていない人が増加している。

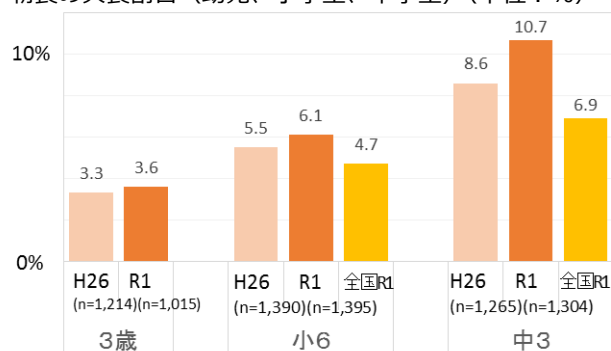
平成26年度（2014年度）と比較すると、「毎日、朝食をとっていない人」の割合は、20代では減少していますが、それ以外の年代では増加しており、特に30代が大きく増加しています。また、小学生（6年生）、中学生（3年生）は、全国平均に比べ、高くなっています。（図1、図2）

図1 朝食の欠食割合（成人）（単位：％）



秦野市Webアンケート調査※2（平成27年度（2015年度）、令和2年度（2020年度）n=400）

図2 朝食の欠食割合（幼児、小学生、中学生）（単位：％）



3歳：3歳6か月児健康診査問診票集計（平成26年度（2014年度）、令和元年度（2019年度））

小6・中3：全国学力学習状況調査※1（平成26年度（2014年度）、令和元年度（2019年度））

用語説明

※1 全国学力学習状況調査

文部科学省では、義務教育の機会均等とその水準の維持向上の観点から小学6年生と中学3年生を対象に実施。

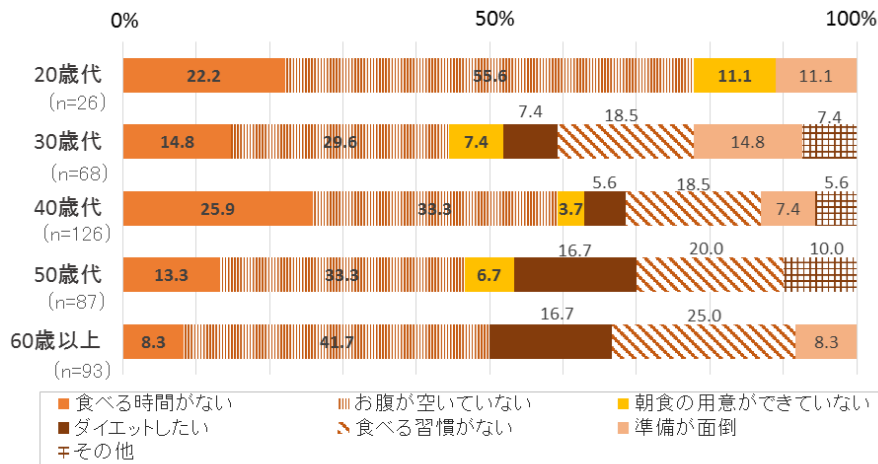
※2 秦野市Webアンケート調査

行政サービスの向上と市民の行政に対する意識向上のための基礎資料とするため、市内の年齢構成比、性別、地区、人口構成の代表性を担保としたネット調査。対象者数は、回収ベースで400人。

朝食を食べない理由は、「お腹が空いていない」が最も多い。

どの世代にも共通する朝食欠食の理由として「お腹が空いていない」、「食べる時間がない」が上位を占めています。また、30歳代から60歳代では、「食べる習慣がない」が理由の人も多くなっています。(図3)

図3 朝食欠食の理由 (単位: %)



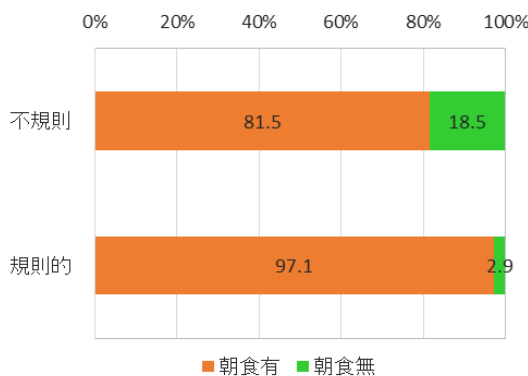
令和2年度(2020年度) 秦野市Webアンケート調査 n=400

(2) 生活リズムについて

生活リズムが不規則な子は、朝食を食べていないことが多い。

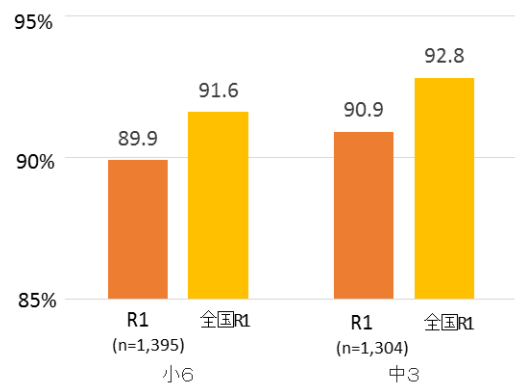
3歳6か月児では、生活リズムが不規則な子は規則的である子に比べ、朝食の欠食が多くなっています(図4)。また、毎日同じ時間に起床している割合は、小学生(6年生)、中学生(3年生)ともに全国平均に比べ、低い現状が見られました。(図5)

図4 生活リズムの規則性と朝食の有無(幼児)



令和元年度(2019年度)
3歳6か月児健康診査問診票集計

図5 毎日同じ時間に起床している割合(小学生、中学生)



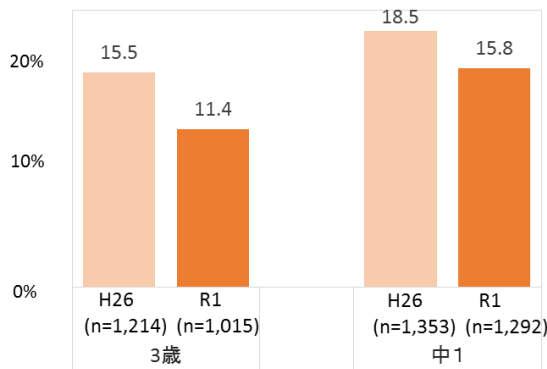
令和元年度(2019年度)
全国学力学習状況調査(小6・中3)

(3) むし歯の状況

むし歯のある子の割合は減少傾向にある。

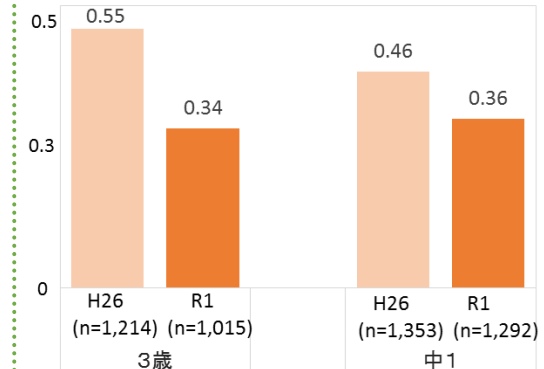
むし歯のある子の割合は、乳歯、永久歯ともに減少傾向にあり、一人当たりのむし歯の本数も減少傾向にあります。(図6、図7)

図6 むし歯のある子の割合(単位:%)



3歳: 3歳6か月児健康診査問診票集計
(平成26年度(2014年度)、令和元年度(2019年度))

図7 一人あたり平均むし歯数(12歳DMF歯数[※])



中1(12歳): 学校保健統計調査
(平成26年度(2014年度)、令和元年度(2019年度))

* 「12歳DMF歯数(DMFT歯数)」とは

(「D:未処置歯数」+「M:喪失歯数」+「F:処置歯数」)÷「検査人数」

永久歯(T:permanent tooth)が生えそろった直後の12歳(中学校1年生)のDMFTは世界的にう蝕(むし歯)経験を評価する標準的な物差しとなっています。

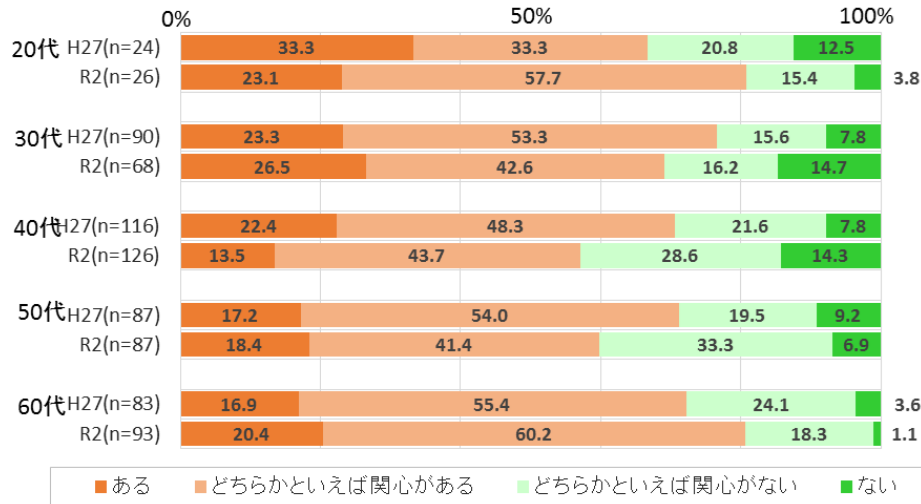
(4) 食育への関心の有無

食育に関心がある人は、20代と60代が多い。

食育に関心がある人(「ある」、「どちらかといえば関心がある」)は、平成26年度(2014年度)と比較すると、20代と60代では増加して8割を超えています。30代、40代、50代では減少しており、40代が一番低くなっています。(図8)

●●● 第3章 本市の食を取り巻く現状

図8 食育への関心がある人の割合（単位：％）



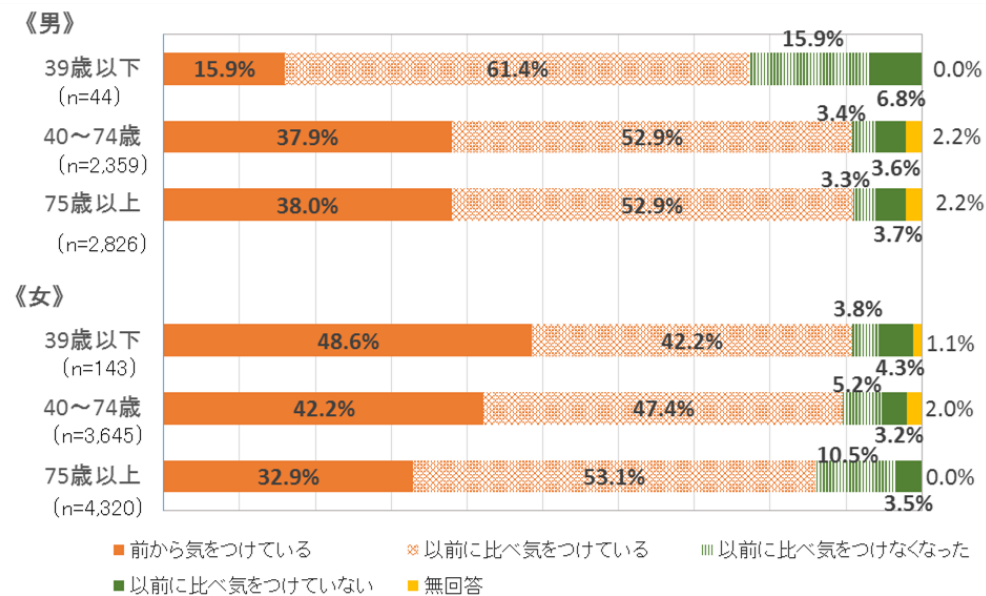
秦野市Webアンケート調査（平成27年度（2015年度）、令和2年度（2020年度） n=400）

(5) 健康意識

健康に気を付けている人の割合は、若い男性が他の年代に比べ、低い。

健康に「以前から気を付けている」、又は「以前に比べ気を付けている」と回答した人の割合は、8割を超えています。男性では若い世代が低く、年代が上がると高くなっていますが、女性では逆に年代が上がると低くなっています。（図9）

図9 最近の身体の健康に対する意識の変化の割合



令和元年度(2019年度) 市民健康診査 n = 7,385 (40～74歳 男 n = 22、女 n = 30) と
 令和元年度(2019年度) 特定健康診査 n = 5,952 の合算

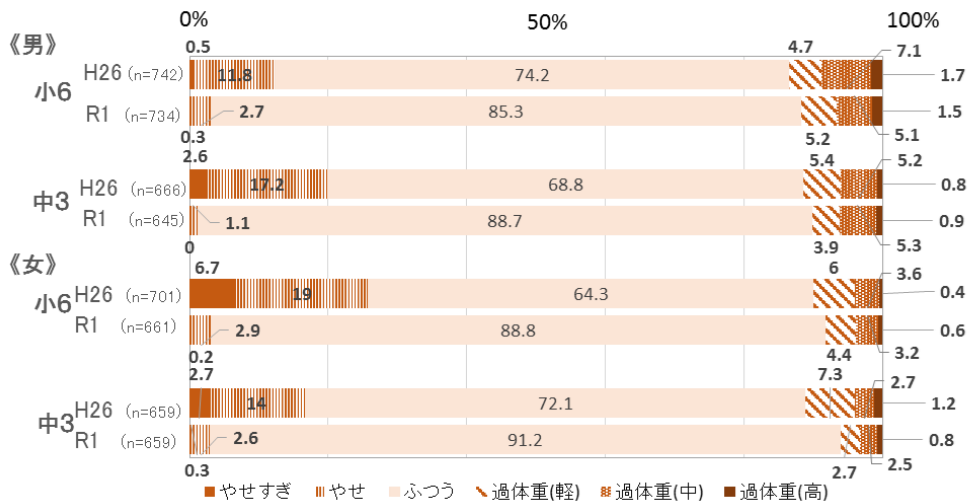
(6) 体型の状況

小学生、中学生の約9割が「ふつう」体型。

本市の小学生、中学生の体型は「ふつう」が最も多く、次いで「過体重」となっています。「やせ」と「過体重」の割合は減少しており、「やせ」の割合が大きく減少しています。

「過体重」の割合は、男子の方が多くなっています。(図10)

図10 体格の状況(小学生・中学生)(単位:%)



秦野市定期健康診断結果(村田式過体重判定*)

* 村田式過体重判定

思春期保健に用いられる体格判定指数です。

標準体重(kg) = 身長(cm) × 係数1 - 係数2

(係数は年齢、性別により少数点以下5桁の係数が設定されています)

過体重度(%) = (実測体重(kg) - 標準体重(kg)) ÷ 標準体重(kg) × 100

* 判定

-20%以下: やせすぎ、-19.9~-10%: やせている、-9.9~20%: ふつう

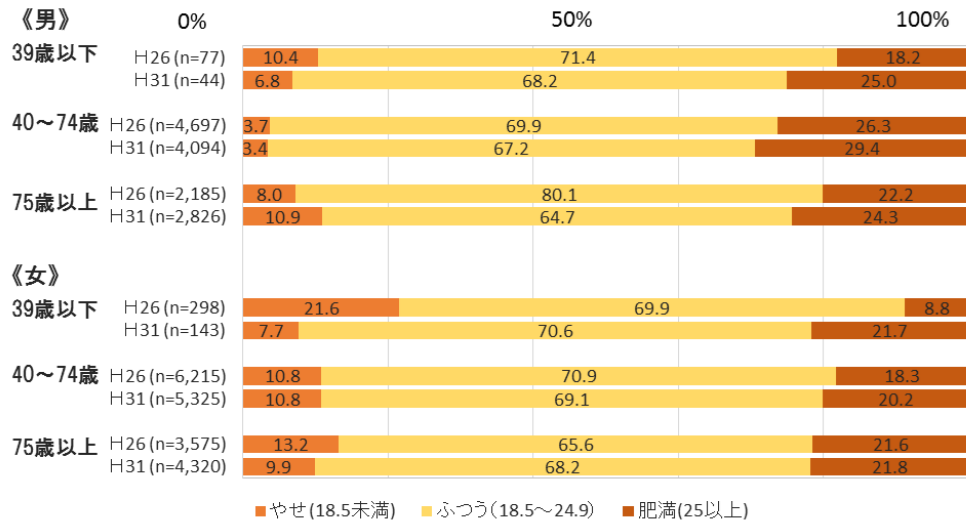
20.1~30%: 過体重(軽)、30.1~50%: 過体重(中)、50%以上: 過体重(高)

成人は、すべての年代で「肥満」の割合が増加。

秦野市の市民健康診査及び特定健康診査におけるBMI(体格指数)の集計結果では、平成26年度(2014年度)に比べ、どの年代においても「肥満」の人の割合が高くなっています。「ふつう」の人の割合は男性と女性とで大きな差はみられませんが、男性は女性より肥満が多く、女性は男性よりやせが多くなっています。(図11)

●●● 第3章 本市の食を取り巻く現状

図 11 体格の状況（成人）（単位：％）



39歳以下、75歳以上：市民健康診査（平成26年度（2014年度）、令和元年度（2019年度））
40歳～74歳：特定健康診査（平成26年度（2014年度）、令和元年度（2019年度））

*** BMI（ボディ・マス・インデックス）**
1994年にWHOで定めた肥満判定の国際基準です。
BMI = 体重 (kg) ÷ 身長 (m) ÷ 身長 (m)

年齢（歳）	目標とするBMI
18～49	18.5～24.9
50～64	20.0～24.9
65～74	21.5～24.9
75以上	21.5～24.9

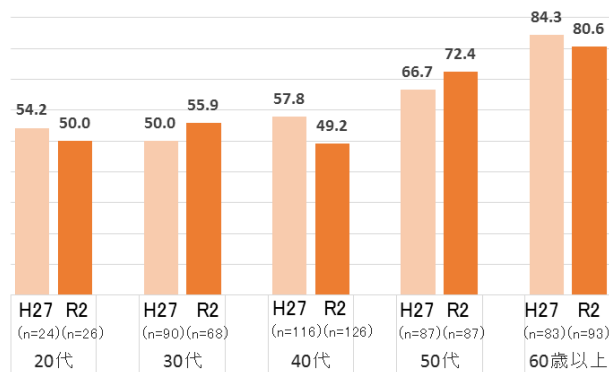
（日本人の食事摂取基準（2020年版）より）

(7) 働く世代の栄養バランス

20～40歳代では、栄養バランスが取れた食事をする人の割合が少ない。

栄養バランスを考え、主食、主菜、副菜をそろえた食事をしている人の割合は、50代、60代が多くなっています。平成27年度（2015年度）と比較すると、30代、50代では増加していますが、20代、40代及び60歳以上では減少しています。（図12）

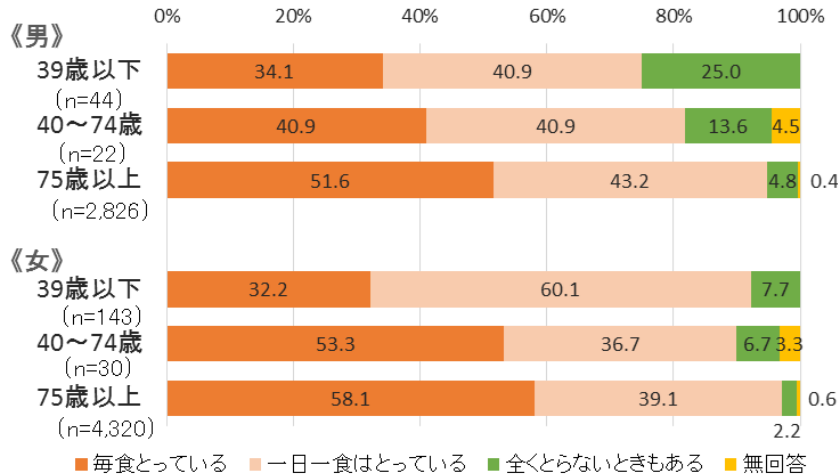
図 12 主食・主菜・副菜のそろった食事をしている人の割合（単位：％）



秦野市Webアンケート調査（平成27年度（2015年度）、令和2年度（2020年度） n=400）

緑黄色野菜をとるようにしている人の割合は、年齢が上がるにつれて高くなっています。「全くとらない時もある」と答えた人の割合は、39歳以下が多く、特に若い世代で摂取していない傾向があります。(図13)

図13 毎食緑黄色野菜を摂取する人の割合(単位:%)



令和元年度(2019年度) 市民健康診査 n = 7,385

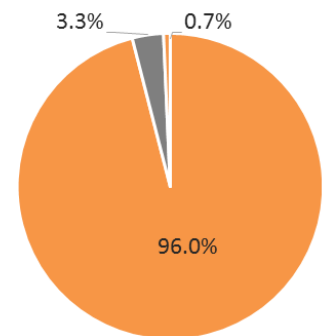
(8) 共食について

共食^{※1}のよさを認識している人の割合は高い。

共食が、こころとからだの健康にとってよいことだと認識している人の割合は、96%となっています。

共食はコミュニケーションを通じて食の楽しさを実感するだけでなく、望ましい食習慣を身に付けることや、食への関心を高める機会となるため、引き続き共食の大切さを伝え、推進していく必要があります。(図14)

図14 共食がこころとからだの健康にとってよいことだと知っているか



令和2年度(2020年度) 乳幼児健康診査アンケート n = 301

用語説明

※1 共食(きょうしょく)

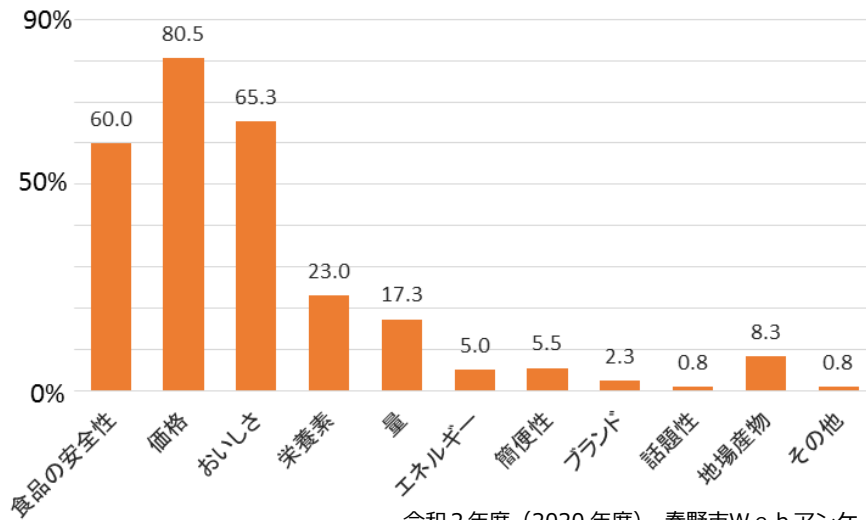
食事を誰かと共にすることで、家族や仲間などと食卓を囲んで、共に食事をとりながらコミュニケーションを図ることです。

(9) 食品を選択する際に重視すること

食品の安全性を意識して購入している人は、6割。

食品を選ぶときに、何を意識して購入するかについて、「価格」が最も高く、次いで「おいしさ」「食品の安全性」の順になっています。(図15)

図15 食品を選ぶときに、何を意識して購入するか(複数回答、単位：%)



令和2年度(2020年度) 秦野市Webアンケート調査 n=400

2 これまでの取組と目標達成状況

第2次プランでは、3つの基本目標及び3つの視点に基づいた食育施策に取り組み、食育の推進を図ってきました。基本目標ごとの成果指標の達成状況及び様々な取組の成果並びにこれらを踏まえた課題について整理します。

成果指標の達成状況

A：目標達成	3
B：目標に近づいた	3
C：目標から遠ざかった	9

※詳細はP60に記載しています。

(1) 基本目標1 からだ 楽しく食べて健康なからだをつくります。 ～生涯食育の推進～

【基本施策】

- ・ 妊産婦のための食生活指針の普及啓発
- ・ 乳幼児健康診査における「家庭における食育」の普及啓発
- ・ 親子食育推進事業による「家庭における食育」の普及啓発
- ・ ポンチーヌによる「早寝、早起き、朝ごはん」運動の普及啓発
- ・ 食に関する指導の充実
- ・ 栄養教諭等による「家庭における食育」の普及啓発
- ・ 食からの健康なからだと体力づくりの普及啓発
- ・ こども園等における「家庭における食育」の普及啓発
- ・ 社員食堂等における栄養表示などの促進
- ・ 学校における食育の推進
- ・ 健康診断等に基づく食生活改善の推進
- ・ 良く噛んで味わって食べることの啓発活動の推進
- ・ 高齢者の低栄養の予防
- ・ 栄養表示の適正化の推進
- ・ 食の安全に関する知識の普及
- ・ 生産者の顔が見える食育の推進

【成果と課題】

施策の方向性	項目		目標値	策定時 (H26)	H29 年度	R1年度	評価
規則正しい食 習慣の向上	①朝食欠食の 割合	3歳児	0%	3.3%	3.7%	3.6%	C
		小学生	0%	5.5%	6.4%	6.1%	C
		中学生	0%	8.6%	11.5%	10.7%	C
		20～30 歳代男性	10%以下	10.2%	-	20.5% ※1	C
	②栄養バランスをそろえた 食事をする人の割合 (主食、主菜、副菜をそろえ た食事をする人の割合)		80%	63.3%	-	62.8% ※1	C
食を通じた健 康意識の向上	③BMIの区 分が正常な 人の割合	女性	75.5%	70.0%	68.3%	67.0%	C
		男性	70.0%	68.8%	70.2%	67.6%	
	④低出生体重児の出生割合		減少	10.4%	11.2%	-	C
食品の安全性 の確保	⑤食品を選ぶとき、安全性 を意識して購入する人の 割合		90%以上	32.8%	-	60% ※2	B

※1 令和2年度（2020年度）の数値

※2 当初の設問は単独回答でしたが、令和2年度（2020年度）の調査では複数回答として
います。

- ・朝食欠食の割合は、第2次プラン策定時よりも増加しています。特に20～30歳代男性の欠食率の増加が大きく、朝食をとるための働きかけが必要です。
- ・栄養バランスをそろえた食事をする人の割合は、第2次プラン策定時より減少しています。食に関する興味や関心、知識を高め、心身の健康のための望ましい食生活を実践することができるよう働きかける必要があります。
- ・BMIの区分が正常な人の割合は、第2次プラン策定時より減少しています。肥満及びやせは、将来的に生活習慣病や高齢者の低栄養につながる恐れがあり、適正体重を維持することが必要です。
- ・低出生体重児の出生割合は、令和元年度の数値はまだ示されていませんが、平成29年度（2017年度）の時点では、増加しています。
- ・食品を選ぶとき、安全性を意識して購入する人の割合は、単独回答から複数回答に回答方法を見直したこともあり、増加しています。

(3) 基本目標 3 **くらし**

自然を大切にし、活力あるくらしをみんなで作ります。

～食でつなぐまちづくり～

【基本施策】

- ・ 観光農業など体験型農業の推進
- ・ 秦野優良農産物等登録認証制度の充実
- ・ 給食における地場産物の利用促進
- ・ 地産地消を支える農業の推進
- ・ 環境に配慮した食生活の促進
- ・ 水や環境に配慮した体験活動の促進
- ・ 農業における資源循環の促進
- ・ 学校等における食に関する指導体制の充実
- ・ 管理栄養士の研修と配置の促進
- ・ 食育に関するホームページの充実

【成果と課題】

施策の方向性	項目	目標値	策定時 (H26)	H29年度	R1年度	評価
地産地消の推進	⑨体験型農業の拡充（観光農業など体験型農業の参加区画数）	400区画 ※1	250区画	350区画	344区画	B
食料生産における環境への配慮	⑩市民1人1日当たりのごみ排出量（資源物を除く）	636.3g ※2	689.0g	676.0g	613g	A
	⑪学校給食の残食率	3.5%	3.7%	2.9%	2.2%	A
食育を担う人材の確保・育成・ネットワークづくりの推進	⑫食育を担うボランティアの活動回数	1,050回	986回	695回	1,128回 ※3	A

※1 当初の目標値（300区画）達成により、平成30年度（2018年度）に上方修正

※2 ごみ処理基本計画改定による目標値の見直しにより、平成30年度（2018年度）に当初の目標値（613g）から修正

※3 対象の見直しにより、令和元年度（2019年度）から食生活改善推進団体以外の市が把握するボランティア（デイサービスボランティア、子ども食堂ボランティア）も数値に含む。

●●● 第3章 本市の食を取り巻く現状

- ・ 体験型農業の拡充（観光農業など体験型農業の参加区画数）は第2次プランの途中で当初の目標を達成しており、目標値を修正していません。
- ・ 市民1人1日当たりのごみ排出量（資源物を除く）は、着実に減少しており、目標を達成しています。
- ・ 学校給食の残食率は年々減少しており、目標を達成しています。中学校給食の開始に伴い、中学校においても取り組む必要があります。
- ・ 食育を担うボランティアの活動回数は対象を見直したこともあり、策定時より増加し、目標を達成しています。食育を担うボランティアは地域で重要な役割を果たしており、引き続き育成や活動の支援を行う必要があります。
- ・ 目標を達成している項目については、関連する計画との目標値の整合性を図り、新たな目標値や項目についての検討が必要です。

3 視点ごとの課題の整理

第2次プランにおいては、「食で育む元気なはだの」を基本理念に掲げ、「からだ」「こころ」「くらし」の3つの視点から食育推進に取り組んできました。その結果、これまでの取組によって目標値を達成している項目もありますが、横ばいや下がったものが多い状況です。「こころ」「くらし」の視点については、地産地消の推進、環境への配慮などの関心が徐々に高まりつつありますが、「からだ」の視点においては、健康な体づくりを意識した食生活の実践や、行動の定着には至っておらず、さらに強化して継続して取り組む必要があります。

また、関係各課や関係機関の取組は計画どおりに実施され、それぞれの評価も高くなっていますが、評価指標としている数値の改善にはつながっていない状況があります。施策の方向性に対する基本施策、また、それを評価する指標が適切に結びついていない現状があり、見直しが必要です。

(1) 視点1 からだ

- ・子どもの頃から朝食をとる習慣や、規則正しい生活習慣を身に付けることが大切です。また、楽しい食の体験から食に関心を持ち、市民一人ひとりが食に関する知識を深め、健康につながる望ましい自分の食生活を実践することができるよう推進する必要があります。
- ・毎日の食生活は、やせや過体重、生活習慣病と密接な関係があり、健康に大きく影響します。食や健康への関心を持ち、適正な食事量をとる習慣や、主食、主菜、副菜をそろえ、栄養バランスのよい食事をするための推進が必要です。
- ・食を楽しみ、良く噛み味わいながら食べる習慣の定着を図ることが必要です。そのための歯の健康保持も重要です。
- ・食品の表示や、食品衛生などの食の安全性についての理解を深め、食品を選択する力を身に付けられるよう取組を推進していくことが必要です。

(2) 視点2 ころろ

- ・食卓を囲み、家族と一緒に食べてコミュニケーションを図ることは、食の楽しさを実感することにつながり、豊かな人間性を育みます。特に子どもにとって、家族や仲間と一緒に食事をし、心を通わせるという積み重ねが心を豊かにし、成長の糧となります。積極的に家族と一緒に食事をする人が増えるような働きかけが大切ですが、これらの食を通じたコミュニケーションは家庭環境の影響を受けやすいと考えられるため、多様な暮らしを支える共食の機会も必要です。
- ・食に関する様々な体験を通じて、食への関心を高めたり、食に関わる人々への感謝の気持ちを育む必要があります。
- ・受け継がれてきた家庭の味を守ることや、季節の伝統行事を知ることでも大切です。作られてきた郷土料理や郷土愛を守るために、食に関する伝統技術や文化を引き継いでいく必要があります。

(3) 視点3 くらし

- ・地元産農産物への関心を高める機会の提供や地産地消を推進し、引き続き食育を実践しやすい環境づくりを進めることが重要です。
- ・農産物の生産、収穫などに直接ふれあう機会をつくり、体験活動や人と人との交流を広げることが必要です。
- ・丹沢の自然の恵みである地下水等について、理解を深め、大切にすることを育むことが必要です。